

雑事記(39)

盛丘 由樹年

戦争遺跡探訪(12)

今回、最近探訪した五つの項目を取り上げる。前回と同様に、首都圏の遺跡・遺物を探す小旅行をした。日付順に記述し、撮影した写真を添える。

① 劔崎砲台跡(しるせき) (神奈川県三浦市) 2021/5/22

劔崎は、三浦半島のほぼ南端、三浦市の東部にあって、東京湾に張り出している。

私は5月22日(土) 横浜に出て、京浜急行に乗った。三浦海岸駅で降りてから、路線バスに乗っていく。岬巡りのバスで劔崎に行く。しかしこの乗継ぎで30分ほど待たされた。同じ県内とはいえ、私の家から遠いところだ。

三浦半島は、東京湾砲台群の一翼をなし、明治の時代から砲台などの防衛施設が置かれ、その数も多く、いくつかの遺構がある。これまでも、このシ

リーズで紹介してきたが、数が多くて切りがないところがある。

劔崎砲台も東京湾砲台のひとつであり、大正15年に竣工したとある。東京湾に侵入しようとする敵艦にいらみを利かせていた。ここに据え付けられたのは、二連装の十五センチ加農砲塔で、合計四門の陣容だった。二つの陣地は百メートルほど離れているという。一つ見つけるまでが難しそうだ。

今では、この辺の軍用施設は撤去され、跡地は畑に戻されたが、砲台の基礎部分だけが残っているという。広大な畑のなかにあるわけだ。

事前に、ネットから地図画像にスポットされた情報を得ていたものの、現地では案内看板など立てられていないから、ほとんど勘を頼りに、下りたバス停(松輪)から大まかな方角を定めて、農道に入り込んでいく。畑が広がるエリアは、高低のうねりがあるので、意外と見通しがよくない。正しい道かどうかぜんぜん確信がもてなかったし、農作業しているような人はほとんどいないから、尋ね聞くわけにもいかない。

途中、物置小屋のような神社があったので、のぞいてみた。鍵のないドアを開けると、祭壇が据えられ、三体の石像が並べられていた。それぞれの足元には、

色彩豊かな花束が置かれている。その華やかさが目を引く。中央の一体が一番大きく、本尊だろう。高さ1.2メートルほどある。地藏像のようにみえるが、隠れキリシタン系の像かもしれないと思ったりする。三浦半島には「マリア観音」が祭られている寺があるという事だから、連想した。



素朴な祭壇
三浦市松輪地区で

地元の人びとの熱心な信仰がうかがえる。無作法ながら、写真に収めた。神社というより寺に近い。いずれにせよ、この地方特有の、素朴な祈りの場であるようだ。

この「物置小屋」のほど近くに、目ざす砲台跡があった。大きな見当違いもなく、何とか目的地にたどり着いて、ほっとした。これで主要な目的が果たせるというものだ。



劔崎砲台跡
畑の中に円形のコンクリート基礎部分がある。直径は約10メートル。中の穴は1メートルほどの深さで土砂で埋められている。

基礎部分が残っており、直径約10メートルの円形のコンクリート構造物だ。その付属物らしい構造物もある。弾薬を供給するためらしい地下構造があること

がわかる。農道の脇にその地下構造物の入り口が見えるが、中はほとんど土砂でふさがれており、除き見ることもできない。

そこから数十メートルはなれたところにも、同じようなものが一式あった。これは事前の情報どおりだ。

見ておきたいもう一つの構造物を目指して、さらに農道を北上して歩いた。やがて、樹木に覆われた盛り土、田墳のようなものが見えてくる。

それは、やや標高が高いところにあるから、わかりやすい。盛り土の中に厚いコンクリートの構造物があつて、車一台が駐車できるような空間が口をあけている。これは情報によると「探海灯格納施設」といわれているものだ。探照灯ともいい、敵の船舶を照らし出すためのサーチライトを入れておくためのものだった。盛り土の周囲を歩くと、土地の境界を示す石柱（境界標石）があり、「防衛庁」と刻まれていた。まだこの一角は国の管理下にあるようだ。

ここから戻るように、ほぼ海岸線に沿って劔崎灯台を目指した。漁港や壁面があつたりして、迂回しなければならぬところもあつたが、劔崎の海岸に来た。

ここは広々とした岩場があり、磯遊びに好適だろ

う。ゴミがすこし散乱しているけれど……。



劔崎灯台

観光気分で訪れた。空にはトビが、手前には不審者が写りこんでいた。

ひとつの入り江の壁面に、一般の人が近づかないようなどころに、怪しいコンクリート造りの廃墟があつた。漁業や観光用の施設とは思えない。戦時中の軍事施設の一つだろうと、私は思ってしまう。おそらく「震洋」の隊員が待機していた施設ではないか？ この入

り江は震洋を係留するのにちようどよさそうな天然の船着場になっている……。

私は、高台の上にもちらりと見える劔崎灯台に近づいてみようと思った。これは劔崎の象徴だ。岬巡りのポイントのひとつとして意味をもつ。

高台に上ると、白い小さめの灯台があった。不審者以外にだれもいなかった。薄いもやがかかったような曇り空だったが、海を見渡すと、東京湾を航行する大型船が、ほとんど動かずに、浮いているのが見えた。さて、海を見たら、町に帰ろう。

②筑波海軍司令部跡（茨城県笠間市）2021/5/30

ここを訪れるのは、私の積年の課題だった。

2014年2月に、公開早々の映画「永遠の0」^{ゼロ}を観てから、そのロケ地となった建屋が「実物」であることを知り、私は行ってみたいと思っていた。さらに、かくれ司令部として造られた地下壕があることにも興味深かった。

でも、ほかに見たい戦争遺跡があったから、後回しにしていた。

限定的ながら公開されていた地下壕が、そのうち、

全面的に公開されなくなった。私は地下壕が見られないなら、おもしろくなかった。どうせ行くなら、それを併せて見たい。それが再開されるのを待つことにした。

ちなみに、この映画はよくできていた。敵味方の戦闘機が飛び交うシーンや、空母が横腹の煙突が煙をはきながら航行する姿（勇姿そのもの）に、実写版として大迫力があつた。こういったものは大画面で見ると限る。昔の映画なら、見え透いたような、ちゃんな模像を使うところだろうが（観客は、そんなシーンでも想像力でカバーしてあげたい）、今の映画は、そんな想像力を必要としないほど、真に迫っている。

死にたくないと考えていた航空兵・宮部久蔵^{みやべ}が、心変わりしていくストーリー展開も悪くなかった。戦争映画ファン必見の映画かもしれない。

その2年後の2016年4月に行った、北朝鮮国境沿いの古代遺跡を巡る中国旅行で知り合った人に、そこをたずねてみたいことを話したら、ちようど地元に住んでいるという彼は後日、詳細な資料を揃えて、郵便で送ってくれた。

けれど、そのときも地下壕が公開されていなかったから、行かなかつた。地下壕が見られないのでは、私

としては不満だった。私は彼の親切を無にした。

再度公開されれば、行くつもりだったが、公開されるといふ情報はいつまでも得られず、長い間、行く機会を失っていた。

ようやく行く気になったのが、本年5月だった。

次に地下壕が公開されるのはいつになるかわからないので、その入り口の外観を確かめるだけでいいだろう、と妥協することにした。大体、ネット上で地下壕内部の映像が少し公開されているから、様子がわかる。

私のところから常磐線の駅・友部^{ともべ}まで遠いことも、足を鈍らせる一因だった。それでも、東京駅から出ている特急に乗れば、友部まで一時間余りでいけるから、時間的に遠すぎることはないと思直した。

私も、映画の主人公のように変節した。私の場合、単に地下壕見物をあきらめただけのことだが……。

30日(土)に日暮里駅から快速で行った。快速で100分かかった。結局は、特急に乗ることを遠慮した。特急券を買うことをためらった。JRの特急券を買うのは慣れていないものだから……。

友部に着くと、駅からバスの便があるが、土日の便は少ないから、私は歩いて行く。途中の路傍に、「筑波海軍航空隊記念館」を指し示す大看板が立っていた。



旧筑波海軍航空隊司令部

玄関口に「旧海軍航空隊司令部庁舎」の看板が掲げられている。奥に並んでいる建物は、見学受付の事務所。

「永遠の0」のロケ地であることをいまだに宣伝していた。

この記念館の施設は「県立こころの医療センター」の敷地内にある。筑波海軍航空隊は、隣の友部航空無線通信所、および、それより南の、滑走路のあった地域を含む広大な土地を占有していた。戦後分割されたわけだ。

当時のままと思われる正門の太いコンクリートの支柱が残っている。看板は付け替えられている。門扉は閉ざされ、人が出入りできる分だけ開けられている。近くに新しい正門が別にあつて、車の出入りも可能になっている。どちらの門から入っても、少し歩けば、左側に記念館が見えてくる。古い門を残すという関係者の配慮が伺える。

映画や写真で見たとおりの、元司令部の二階建ての幅の広い建屋だ。中央に車寄せ屋根のついた玄関がある。でも、見学者はそこからは入れない。

隣に建てられた、事務所のある記念館ビルでチケットを購入し、IDカードのようなものを首にぶら下げて、裏の勝手口から入らなければならぬ。

さっそく、私はその手続きをした。5000円を払った。

この記念館のキャッチコピーとして、「日本最大級の戦争遺跡で語り継ぐ、筑波海軍航空隊記念館」と、チケットにも書かれている。

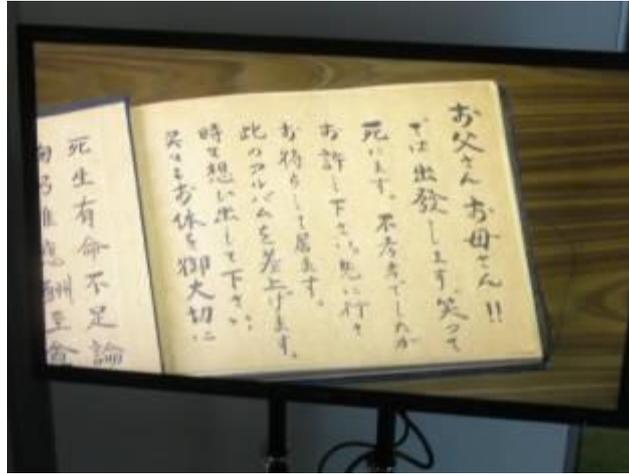
記念館ビルも本館も、内部は一、二階とも展示室になつており、ゆっくり見て回る。けっこう見ごたえがある。記念館ビルでは戦争に関する企画展が行われて

いた。本館は常設展といったところだろう。展示物の中には、マニアにとつては、興味あるものがいくつもある。航空機の部品や装備が、ところ狭しと置かれている。いずれも、さび付いていたり、変形したりしているけれど、本物の重みがある。それぞれ興味深い由緒がありそうだ。



一階の部屋にある展示物
航空用魚雷、複数の航空エンジンや部品類が
置かれている

中でも、航空魚雷があるのには驚かされた。



特攻隊員が書き残した伝言
「笑って死にます」とは、泣かせる。

また、特攻隊員の遺品が展示されているものには、生々しさがある。

本館の二階には、当時の隊員が寝起きたベッドが並べられた部屋や、部隊長が座っていたらしい机

や椅子のある部屋があり、自由に見て回れる。

そして、「県立こころの医療センター」は近代的な施設に改築されたが、古い病棟の一部が残っている。館外に出た私は、点在する戦前の遺構（観光的に紹介されている）を見るついでに、その病棟エリアを一巡してみても良かった。今ではすべて無人の病棟は、長屋のような平屋建で、直線的な渡り廊下が付けられている。逃げ出せないようにするためらしい鉄枠の窓などが施された部屋もあった。そこで隔離されて暮らしていた患者たちの怨念が籠っているかのようなだった。

ここを後にして、司令部地下壕の場所を目指して歩いた。「医療センター」の隣の広い地域は、航空局通信所として、引き継がれている。

その外周に沿う道を歩いていると、刈り込まれた近くの草むらに、オスのキジがいるのをフェンス越しに目撃した。カメラを向けようとすると、すぐに隠れてしまったのは残念。私にとって野生のキジはやはり珍しい。

筑波航空隊の滑走路があった辺りには、遠回りになるので行かなかったが、今になって思うに、直線道路を歩いてみるのも一興だったかもしれない。

地下壕の場所については詳細な情報を得られず、私は地図上でおおよその見当をつけていた。二所神社の近くにあるらしいので、まず神社を探した。かなり遠回りしてたどり着いた後に、近辺を歩くと、やがて、円墳のような盛り土に地下壕の入り口を見つけた。

入り口は嚴重に封鎖されており、すきまもなく、のぞき見ることもできなかつた。近年開けられた形跡もない。これでは公開される予定も当分ないのだろう。

場所を確認できただけで私は満足し、引き上げることにした。帰りは、友部から東京駅まで特急に乗ってしまった。駅の券売機の前で、もたもたしていた人がいたけれど、私は、慣れないなりに、そりなりに切符を得て、少々気分よく特急に乗れた。

③富津岬・堡壘砲台跡と射撃試験場跡（千葉県木更津）2021/6/17

富津岬で、私は若いころ、野宿覚悟で房総半島にきたものの、野宿はできず、たまたま見つけたキャンプ場で三角屋根のバンガローを借りて、一人で泊

まった経験がある（今でも営業しているが、バンガローの代わりにテントになっていた）。30代には家族で潮干狩りに来たこともあったが、ここに砲台跡などがあることは、当時知らなかった。

富津岬では、砲台（正式名・富津元洲堡壘砲台）は旧式化し、東京湾砲台の一翼としての役目を終えた後、射撃試験場として使われた遺構などが今日に残っていると聞いて、見に行くことにした。

ネットのサイト「千葉歩き&千葉アルバム」（チバル）によると、

明治17年（1884）に完成した元洲堡壘砲台は、外濠を掘って海水を引き入れ、上部には榴弾砲とカノン砲が設置されていた。

しかし、大砲が旧式となつてしまったため、実戦で弾が発射されることはなかった。

大正11年（1922）からは、旧陸軍技術本部の実射試験場「富津射場」となり、旧陸軍最大口径を誇る榴弾砲や、列車カノン砲の試射なども行われた。

実射試験場とのことだが、いざとなれば、東京湾に侵入してくる不審船に砲門を向けることもできたのかもしれない。

この日私は早起きして、小田急線の快速で新宿に出て、バスターミナルから高速バスに乗り、木更津まで一気に来たのだが、そこから先の交通の便が悪いことに気づいて、少々うんざり。

結局、路線バスで富津公園にたどり着いたのは、11時を過ぎていた。降り立つと、ここは手入れの行き届いた公園であることが一目でわかり、好感が持てた。記憶にある富津岬とはだいぶ違っていた。人の姿が少なく、閑散としていたところが、不審者が探訪するにはちやうどよさそうだ。

遺跡めぐりをするには、下図のような「戦争遺構ガイド」の看板が主要なところに複数立てられているので、わかりやすい。しかし、実際に探し回ると、それらの多くはジャングルのような林の中にあるから、なかなかたどり着けない。

富津の旧砲台は、城郭のように堀をめぐらせている。扇の形をしている部分を中の島と言っている。早速、堀（海水を引き込んだという解説文があったが、中に亀がいたから、淡水だろう）に架かる優雅な石橋を渡り、階段を上っていった。その上に天守閣がそびえていたと仮定しても、まったく違和感はない。



富津岬公園の戦争遺跡の場所を示す看板図では、監視所（トーチカ）など①～⑥の6カ所が示されている。

石段を上がっていたときに、石やレンガで造られた地下施設の一部に出くわした。アーチ状の石積みを持つ入り口が口を開けている。ドアも鉄柵もないから入ってゆく。中は狭い空間で、奥には入れなかったが、要塞らしさが感じられた。

そこからまもなく上部の細長い平坦地に出た。ここには、砲台の一部分だったらしい石造物がところどころあるのだが、はっきりとそれとわかる遺物は見出せなかった。この地は高さがあり、眺めはよい。観光客用に三階建て相当の展望台が設置されていたが、私は上らなかつた。

そこを降りて、またまた優雅な石橋を渡り、南側に広がる林の中の、ここが射撃の試験場だった遺構



砲台跡に残る要塞構造の一部
「石室」の中から不審者が出てきた

ほとんどジャングルの状態の林の中に入って、まもなく最初に、左右に門のように置かれた二つの構造物に出会った。

頑丈なコンクリートできており、銃眼のような穴を二つ備えている。トーチカと呼べるものだろう。

この辺は、射撃の試験場だったところはジャングル



試験場の観測施設
コンクリート構造物で、銃眼のような穴がある。ガイド上の②のもの

を探し回ることにした。それらは、木々に埋もれるように点在する。

のような林ではなく、見通しのよい平地だったと思われる。人間がコンクリートの後ろに隠れて、着弾を確認するという、かなり原始的なことをやっていたのだろうと、思いをはせる。砲弾が目標をそれて、こちら側に人が潜むコンクリートを直撃すれば、彼らが死傷する事態にもなりうるから、危険がいっぱいだ。かといって、着弾を直視していないと、上官に怒鳴られる——「コラー、x x二等兵、どこに着弾したか、わからんのか！ キサマは目をつぶっていたんか？」

この辺は、いつのころからか、草木の刈り取りをしなくなったのだろう。自然のままの植生になり、ジャングル状態だ。中をくねりながら行く遊歩道だけは確保されている。

マニアの間では、これらのコンクリート遺構の中でも、天井がドーム上に丸みを帯びているものをボウズと言っているそうだ。頭が丸いから、ボウズ。

ボウズを求めて密林の中をさまよい歩く。私はいくつかのボウズを探し当てた。

最終的に、私は、海辺に近いところにあるボウズを見つけたことができた。草深い細い道を歩いた末の発見だったから、少々うれしい。

このボウズを見つけたことで、ガイド看板に示されたすべての遺構を巡ることができた。



試射場の観測施設
これは北面の海岸に近いところにぼつんとあった。ガイド上の⑥

実はボウズに関して、もう一つ、公式には載っていないもので、地元でも一部の人にしか知られていないものがあるという情報がある。それを探すのはあきらめた。おそらく、遊歩道からそれたジャングルの中にあるのだろう。

私は近くの、砂浜の広がる海岸に出て座り込み、

潮風に当たりながら、沖合いでボードセイリングなどをやっている若者たちを眺めた。海上は波風が強いから、彼らはひっそりにセイルを操っていた。時にはチンしていた。海で遊ぶのも楽ではなさそうだ。自分自身のことには棚に上げて「おつかれさま」

④三浦半島・三戸海岸・洞窟陣地跡（神奈川県三浦市）2021/6/24

三戸海岸は、三浦半島の西側にあり、駿河湾を臨んでいる。駿河湾の防衛のための軍事施設の一つがここにあった。

連合国軍は、駿河湾に上陸計画を立てていた。コロンネット作戦といい、かなり本格的に準備が進められていた。ノルマンディー上陸作戦に匹敵する規模の兵力を動員するものだった。

日本軍としても、上陸場所は不明としながらも、その場所の一つとして駿河湾を想定し、上陸に備え、駿河湾周辺の各所には、迎え撃つための部隊を配備した。昭和20年には、緊迫した状況があったわけだ。本土決戦が近づいていた。

といっても、日本軍の消耗しきった戦力では「形だ

け」の備えであって、そのときになれば、無駄な抵抗しかできなかつたろう。連合国軍の上陸作戦は、もちろん、日本の降伏が決定的と予測された時点で棚上げされた。

連合国が日本の降伏をいつ察知したかは、諸説あるでしょう。その前から政府間で秘密裏に、降伏条件について交渉していたのであり、遅くとも、それは原爆投下前だろう。

三戸海岸の北部と南部の岩場には、洞窟陣地の跡が残っている。

ここ初音地区には、海軍が横須賀基地に代わる新たな航空基地（黒崎飛行場）建設のため、滑走路を造りかけたが、終戦になって未完に終わったという。航空基地に関しては、ここより北の長井地区（現在、ソレイユの丘がある辺り）にも建設が進められた。そこらはほぼ完成していたという。こちらの滑走路の遺構としては、整地された平面部分と、直線的な道路が走っていることがその名残をとどめている。

私は6月24日（木）、京急の終着駅・三浦口で降りてから、徒歩で三戸海岸に向かった。地図上では1.3キロほどの距離だから、たいしたことではないが、海岸近辺特有の、日差しが強かった。

途中、畑の中を歩いていくと、海岸に近い村落の中にお寺があったので、寄ってみた。これが福泉寺だった。

ここは戦時中、第56震洋隊の本部が置かれたところだ。ネット情報では、境内にその碑が立てられているそうだが、私は見落とした。

入山してすぐの左側の壁面に苔むした横穴があったので、のぞいてみた。人が立って入れる高さのある洞穴だ。こういう時のために私はLEDライトを持ってきていた。これは防空壕ではなく、古代に造られた横穴募の類のようだった。そして本堂では、金ぴかの三尊像を拝観した。

そこを後にして海岸に出た。かなりの広さのある砂浜の、弓型の海岸線は、なかなかのものだ。空は晴れて夏と変わらないから、若いころの私なら、水着に着替えて、海に入っていたかもしれない。一応、それもリュックの中に用意していた。広いビーチに人影がほとんどないのが、奇異なところだ。

北側の、砂浜の向こうに「黒崎の鼻」があり、南にも似たような高台が見える。まず、ネット上の写真で見覚えのある「黒崎の鼻」に向かった。



黒崎の鼻
三戸海岸の北部に位置する。
右側に半分見える建屋は、廃墟になっている海の家。

ここには、三戸海岸北部洞窟陣地があった。「黒崎砲台」ともいわれているところだろう。

やや海側に突出した高台は、樹木で覆われているが、内部は岩でできていたものだ。軍部は、岩を掘削し、内部を要塞構造にしたといわれている。

私は海岸線を歩いてみて回った。海岸よりやや高い位置の、壁面の岩陰に大小の洞窟が口を開けていた。

中には天然の海蝕洞窟もあったが、人工的に造られた洞窟があるは、やはり軍隊によるものだろう。



「黒崎の鼻」洞窟陣地の一部
大きな洞窟。草むらに隠れているが、海側に向けて大きく開口している。

特攻モーターボート「震洋」を格納していたと思われる洞窟もあった。

中でも大きく口を開けている洞窟があり、その前面は8本ほどの白い角材の柱で囲われていた。意味がはっきりしない柱だが、おそらく「落石の恐れがあるか

ら近づくな！」ということだろう。一種の境界のつもりだろう。私は自己責任で柱の間を通り、中をざっと見た。ここでも震洋を格納していた可能性が高いとみた。奥には横穴があり、分岐する通路が伸びているようだ。

海岸を歩いて「黒崎の鼻」を一通り見てから、約1.5キロある三戸海岸を、逆方向の南に歩いた。

南の高台には通称は付けられていない。その手前にある初音漁港を過ぎ、岩場に入っていた。ただし、ロープが張られている。この先は一般の人が入ってはいけないということのようだ。これも自己責任なんだろう。

まもなく、崖下の壁面に近づく、「黒崎の鼻」と同様な洞窟がある。震洋の格納庫らしい洞窟や、人がやつとすり抜けられる狭い横穴などがある。ここは、一部の人の間では、三戸海岸南陣地と呼ばれている。洞窟陣地らしい、銃眼のある岩が興味深かった。

いくつか、小さな砂浜や岩場を過ぎ、さらにこの先の岩場の海岸を歩いて行くと、小綱代湾に出られることを私は期待していた。小綱代湾は、震洋の発進基地の一つだったことが知られている。



三戸海岸南部の洞窟陣地
岩の中腹にあって、銃眼が三戸海岸をにらむ

しかし、やがて行き止まりになった。そこでは、岩の壁面が垂直に海に落ち込んでいたから、歩いては通れない。迂回するルートがあることは頭に入っていたが、本日の目当てを一通り見て満足し、岐路につくことにした。

この途中、地図をろくに見ていなかったものだから、私は迷ってしまった。駅の方角を完全に間違え、後に

なつて遠ざかる方角に歩いていたことを知った。広い畑の中を歩いていた時、おかしいと感じていた。割り込んで駅の方角を訪ねた。

答えてくれた内容で、駅ははるか向こうであることを知った。その中の一人が、同情したのか、親切にも、無駄話(?)を中断してくれ、私を軽トラで駅まで送ってくれろという。その人は80歳前後の老人で、運転がおぼつかない人だった。車の中で、戦争遺跡について話をもちかけると、

「この辺の海岸に震洋の格納庫が残っているよ。この土地には海軍が来て、わしら住民は、畑をつぶされ、飛行場を作らされて、えらい迷惑だったよ。立派な道路ができたことだけがよかった」などと語ってくれた。運転がおぼつかない人に話しかけるべきではなかったかもしれないが、無事に三浦口駅に着いた。参考となる証言が得られたし、炎天下を歩き回って疲れ果てていたから、「渡りに軽トラック」のありがたさだった。うれしい私は丁重に礼を言った。

⑤ 貝山かいやまの地下壕と第三海堡遺構かいほう（神奈川県横須賀市）2021/7/10

貝山に地下壕があることは知っていたが、長い間封鎖されていた。横須賀市は近ごろ一般の人が見学できるように、補強工事・照明の配備などして、今年の6月から「貝山地下壕ガイドツアー」を始めている。

それを聞きつけ、私は早速応募し、参加した。でも、応募にはいくつかの条件や期日があつて、結局、第2回めの7月のツアーに参加することになった。

7月10日（土）9時30分の集合時間に間に合うように、私は7時に家を出た。

京浜急行の追浜駅を降りてから、2キロの道を歩いて現地に向かった。この日はまだ梅雨が明けていないというのに、晴れ上がった天気で、暑かったのが誤算だった。やはりバスに乗るべきだったか。

海岸近くの第三海堡遺構が置かれた区域が集合場所であり、私は集合時間の10分前に着いた。すぐに受付手続きをすると、先着順に7人を第1班とするグループが編成された。会費は一人700円だから、安い。ボランティアらしい高齢のガイド2人が付いて、それぞれ場所によって案内と説明を行ってくれる。



第三海堡の遺構
遺構の前で案内人（左側）と参加者たち

まず、第三海堡の遺構のそれぞれを見て回りながら、彼らは説明してくれた。私は以前一度ここに来たことがあつて、知っていたけれど……。

第三海堡は東京湾上に、三浦半島の横須賀と房総半島の富津を結ぶ線上に作られた人口の島で、敵艦に対処するために要塞化された陣地であり、複数のカノン砲が据え付けられた。難工事であろうが、大正10年に完成したが、大正12年の関東大震災によってあつけ

なく島ごと崩壊したという。

コンクリート構造物の数々は、船の航行の邪魔を
する存在になっていたから、戦後になって、大型のサル
ベージ船によって、海底から引き上げられたものが、
ここに置かれた。原形を保ったまま、回収されている。

弾薬倉庫、探照灯の格納庫など、それぞれ分厚いコン
クリートで作られていることがわかる。探照灯の建屋
には、それを出し入れする機構がついている。

それから、貝山の地下壕に向かう。歩いて5分ほど
のところだ。壕への潜入の前に、準備と由来の説明が
あった。

この追浜地区には終戦まで「横須賀海軍航空隊」が
あったところだ。大正5年(1916)に創設された。

貝山の北側、その頃に埋め立てられた平地が広がる地
域には、飛行場があった(今ではその一部が日産自動
車のテストコースになっている)。貝山の南側には海
軍機の研究開発を主に手がけていた「海軍航空工廠」
があったし、貝山のそばには、初期の予科練の教練場
があった。手狭になったためか、それは昭和13年に
は土浦(霞ヶ浦)の方に移転された。この一帯は航空
機の研究開発と教育の面で、重要な拠点だった。



貝山地下壕の中で
それぞれ借りたヘルメットをかぶり、持
参したライトで壁面を照らす。熱心に見
学していた女性3人組

太平洋戦争の雲行きが怪しくなつて、ここが攻撃さ
れる危険が高まり、その対応の一つとして海軍は地下
施設の構築を急いだ。地下壕の建設だ。貝山や、ここ
より北側にある夏島(陸続き)などに、地下施設を作
った。司令部としての機能が果たせるような規模の大
きいものを目指したようだ。その一部が公開されて、
私も見て回ることができるわけだ。

貝山は、盛り上がった岩盤のようなもので、小さな

丘のような地形だが、内部全体に地下室やら通路やらが造られていたという。案内人は、調査されていない部分はまだあって、全体像がみえていないと解説していた。中は暗く、意外と広い空間が多かった。中には会議室として造られたという部屋があった。地面がでこぼこしていたり、天井から水滴が落ちてきたりして、やや歩きにくい。

地下壕を出て、貝山の上に登った。ここは「貝山緑地」として公園になっている。路傍に石碑など、戦争にちなんだものがいくつかあって、見て回りながら、ガイドが交代して解説してくれた。ひとときわ高い展望台にも上って、周辺の地域に何があったか、教えられた。ガイドは地元の人らしく、よく知っている。工場の敷地内には、当時からある建屋「かまぼこ型格納庫」が見えるなどと説明した。

貝山から降りるとき、案内看板に砲台跡が描かれていたので、私はガイドに案内を軽く頼んだが、ガイドたちは「草が生い茂る中にあるので、レンガの破片があるだけだから」と言って、案内してくれなかった。

そして外周を見て回った。貝山の裏側に、燃料貯蔵タンクの遺構があった。トンネルの入口のような構造物が6基残っている。一つのタンクの容量がどのくら

いあるものかはわからなかったが、そうとうため込んでいたようだ。（横浜市磯子地区にある石油コンビナートの巨大タンク群と比べれば、ごく小さいものだ）航空燃料などは、日本では貴重になっていたので、大切にされていたことがわかる。



燃料貯蔵タンク遺構
貝山の壁面に6基の燃料貯蔵タンクが残っている。

約2時間半のツアーはなかなかハードな、強行軍だった。